



**転生前のチュートリアルで
異世界最強になりました。7
準備し過ぎて第二の人生は
イージーモードです！**

α L P H α L I G H T

小川悟
Ogawa Satoru

CONTENTS

過去編

239

番外編

215

本編 テックス仮面と元老院会議

007

I became the strongest in another world
in the tutorial during my lifetime.



シャノン

ヴァンチザード王国の王妃。
美に対する執着が強い。

マリア

ドロテアを姉^姉と慕^慕う魔術師。
異世界イチ胸が
大きい(テンマ調べ)。

ドロテア

国内では知らぬ者が
いない英雄。
トラブル体質なことを
反省中だが……？

デンセット公爵

王座を狙^狙う悪辣な貴族。
バルドーとは浅からぬ
因縁がある。

ジジ

人族の少女。
泣き虫で不器用だが
頑張り屋。

テンマ

33歳で命を落とし、
異世界に転生することになった
元ゲーマー。ゲームの知識で
この世界を楽しみ尽くす。

アンナ

テンマの研修を
管理していた元女神。
神格を剥奪され、
テンマの仲間に。

バルドー

ドロテアの元冒険者仲間。
しっかりしているが、
キケンな趣味を持っている。

登場人物紹介

本
編

テックス仮面と
元老院会議

I became the strongest in another world
in the tutorial during my lifetime.

第1話 社畜と慰霊

俺、テンマはここ何日か、『呪いの館』が建っていた場所にて社畜のように働き続けていた。

狐獣人の冒険者・バルガスと、彼が面倒を見ている冒険者パーティ『狐の守り人』のメンバーとともに、館の残骸やら何やらを再利用出来る物とそうでない物に分けた上で手分けして収納する。

そんなことをずっと繰り返していた。

バルガスはかつて俺らを魔族と勘違いして襲ってきたA級冒険者パーティ『妖精の守り人』のリーダーだったが、なんやかんやあって今は一緒に行動している。

社畜……か。

前世でもこんなに働いたことはなかったんじゃないか？

パワハラしてくるような奴がいらないぶん、気持ち的には全然マシだが。

そう、三十三歳で日本にて命を落とした俺は、十四歳の少年として異世界へ転生させられた。

転生後にすぐさま死んでしまわないように、研修を受けさせられたのだが……これが長かった。

元々研修期間は三ヶ月と聞かされていたのに……十五年も研修を続けるハメになるなんて、思ってもみなかったよ。

俺の研修を管理していた女神のミスが原因だったらしいけど、まあその十五年も無駄ではなかったな。

前世にゲームで得た知識を活かして効率よく訓練をしていたこともあって、ステータスが桁外れの数値になったわけだし。

それからは狐獣人の美少女・ミーシャや、人間族と兎獣人のハーフの姉妹であるジジとビビ。国の中でも指折りの魔術師で、英雄とまで呼ばれているのにボンコツでトラブルメーカーなドロテアさん。そしてその姪孫でありロンダの領主・アルベルトさんの娘のアーリン（諸般の事情で現在は別行動中だが）。あとはドロテアさんの元冒険者仲間、仕事も戦闘もなんでもござれなバルドーさん。そして、俺の研修の設定をミスったことで神格を剥奪され、この世界にやってきた元女神のアンナ。

……なんていう、かなりバラエティーに富んだ仲間に囲まれて気ままな生活を送っていた。

とはいえずっと異世界にいたかと言えば、そうではない。

空間を複製出来る魔術——ディメンションエリアを用いて生成した、どこでも研修施設——『D研』内に建てた『どこでも自宅』で過ごす時間も結構ある。

D研には豪華な部屋や工房、プールまであって、かなり居心地が良いから、気を抜くと入り浸ってしまう。

正直、そのせいで異世界を巡るペースが遅くなっている感はない。

だって未だ最初に訪れた開拓村に辺境の街・ロンダ、王都くらいしか行けていないわけだし。

それにしたって、だ。

折角異世界の王都に来たっていうのになんで俺は仕事をしなきゃいけないんだよ……。

ここは、王都の中にある呪いの館——否、元呪いの館の敷地内だ。

この館は随分前から強い呪いによって汚染されていた。放置すれば周辺に呪いが広がり、最悪の場合は死人も出ると言われていたほどに。

それ故、王家は秘蔵の魔導具で呪いの館を封印していた。

しかし、ドロテアさんがその呪いを解くことを条件に、館を研修施設を建てる場所として貰い受けられないかと提案。彼女の元冒険者仲間でバルガスの妻であるマリアさん、そしてバルドーさんが各所と調整したことでそれが実現した、というわけだ。

……もつとも、浄化するのは俺と、アンナだったわけだが。

俺が編み出した訓練方法である『テンマ式研修』を学ばせるための研修施設をロンダに造り、それに続いて王都にも同じような施設を造れないかなーとは思っていたから有難くはあるけどさ。

そうして解呪作業を進めていく中で、館の呪いにはそれを浄化しなければ呪いを根絶出来ない核があることが判明。それすらも祓うと——なんと、バルドーさんの母親の幽霊が現れた。

かつてデセンスット公爵とやらと闇ギルドの策略によって、この館に封じ込められてしまったらしいのだ。

彼女はバルドーさんに温かい遺言を遺して消えた。

まるでそのことを忘れようとするかの如く、バルドーさんは仕事に邁進した。

その結果、俺達に山のような量の仕事が降ってきている、というわけだ。

特に俺は館の周囲に壁を造らされ、館を撤去した上でその残骸の分別までしているわけ……働かされすぎである。

館はなくなったものの、先日まで呪いの影響があるからと封鎖されていた地域や、そこに隣接する土地までもらえるらしいから頑張る意味は十分にあるんだが、大変な物は大変だ。

もつとも俺達もバルドーさんの母親の件においてそれと触れられないから、なんだかんだ黙々と仕事をしていて、捗ってはいるんだけどね。

それにしても……ぶっ。

俺は視線を横に遣って、思わず笑いそうになる。

俺の視線の先にいるのは、狐耳を着けたバルガスだ。

一緒に行動する全員に、収納スキルをはじめとした便利な機能搭載の、アクセサリーを模した魔導具を渡している。

バルガスと、ミーシャ以外の狐の守り人に渡しているのは、パーティ名に因んだお揃いの狐耳型の魔導具だ。

他のみんなはよく似合っているのに、バルガスには本当に似合っていない。それでも片付けをするためには狐耳の収納スキルを使わねばならないわけで……。

本人も自分に狐耳が似合わないことは自覚しているから最初は嫌がっていたが、周辺を壁で囲まれているから人目につかないだろうってことで今や諦めている形だ。

しかし、一度狐耳を外すのを忘れたまま、泊まっている宿『妖精の寢床』に戻ってマリ

アさんの妹で店長のメアリさんに指摘されたことがあったんだよな。

恥ずかしさのあまり真赤になったバルガスの顔は、忘れられない。

狐耳を外しながら、俺を睨んでくるのは納得出来なかったが。

それから数時間して、ようやく館の後処理が終わった。

呪いの館を完全に撤去したあと、地下に広がっていた空間まで埋めてやった。

そのあと、敷地周辺の壁を魔法で強化して、侵入者が入れないように結界の魔導具を設置した。

ただ周辺の土地に関しては、まだ手付かずである。

とりあえず色々と問題が片付いてからにしてほしいと、バルドーさんから言われたからだ。そんなわけで、呪いの館があった敷地内で一番日当たりの良い場所に慰霊碑を建て、地下空間に大量に落ちていた闇ギルドの犠牲者達の遺骨を埋葬した。

更に慰霊碑の横に小さな礼拝堂を建てた上で、アンナが念入りに浄化を掛けたことにより、ここら一帯がどこか神聖な雰囲気になった気がする。

折角なので、宿で休んでいる仲間達を呼びに行こう。

「うむ、居心地の良い場所になったようじゃな」

ドロテアさんが満足そうに言った。

まるで自分が慰霊碑を建てたような口ぶりに、イラッとする。

ドロテアさんはバルドーさんの指示で魔術師ギルドや魔導具ギルドに何やら交渉しに行っていたようだが、すぐに一緒にいた弟子のエクレアさんと、マリアさんに来るなど言われたようだ。

マリアさんから聞いた話では、ドロテアさんが一緒だと最初は相手も恐縮するので主導権を握りやすくなるらしいが、ドロテアさんは途中で余計なことを言い出すんだとか。

しかも『何も話すな』とお願ひすると不貞腐れて邪魔をするらしい。

結局、みんなが忙しく働いていたのに、ドロテアさんだけは俺の従魔であるシルバールフのシルとピクシードラゴンのハルと遊んでいただけだったのだ。

俺がジト目でドロテアさんを睨むと、何かを察したようで、俺から離れていく。それから俺は周囲を見回し……気付く。

なんで従魔達は、ここでくつろいでいるんだ!?

ドロテアさんの従魔でクインホーンラビットのピヨン吉は慰霊碑の土台となっている石に仰向けになり、ピピの従魔のホーンラビット・ピヨン子はその腹の上で寝ている。

ハルは慰霊碑の上でだらしない格好で尻尾を垂らして寝転んでいて、シルはピピと一緒にミィシャの従魔のワイルドコッコ——ロンガを追いかけている。

どう考えても呪いの館の跡地って感じの絵面ではない。

「そうそう、テンマ。昼の準備が出来ているそうじゃぞ。早く食べるのじゃ!」

ドロテアさんは、宿の方向に体を向けて、そう言った。

食いしん坊の従魔達が我慢出来そうにないので、とりあえず昼食を食べるかな。

俺も宿の方に向かって歩き出そうとして、ふと振り返り慰霊碑を見る。

やはり神聖な雰囲気があるな。

そして、敷地をゆつくりと見回す。

もう呪いは完全に浄化されたようだ。

特に深く考えることなく、ただ流されるまま浄化作業をしただけだった。

でも良いことをしたな、と少しだけ胸の奥が温かくなるのを感じたのだ。

第2話 バルドーの決意

慰霊碑が完成したその日の夜、バルドーさんが『テンマ様だけに話がある』と、どこで

も自宅の俺の部屋を訪ねてきた。

「ここがテンマ様の秘密の部屋なのですね？」

バルドーさんが嬉しそうに話すのを聞いて、思わず身構える。

何としても、貞操を守らなければならない！

「別に秘密の部屋ではありませんよ。ピビもよく泊まりに来るし、ジジやアンナは部屋の掃除で普通に立ち入りますから」

「そうなのですか？ ドロテア様がテンマ様の部屋に入れてくれないと愚痴を漏していたので、私だけ特別に部屋に入れてくれたのかと期待したのですが」

髭を弄りながらバルドーさんはそう口にして、ニヤリとした笑みを向けてきた。
変な期待をしないでください！

そんなふうには叫びたくないのを堪えて、警戒しつつ応接セットが置かれた机の反対側を指差す。

「どうぞそこに座ってください」

「私はお隣でも構いませんがねえ」

それは断ります！

なんて口に出して言いたいところだが、むしろ明確な答えを返すことが逆効果になりそうなのがしたので、俺は話を変えることにする。



「それで、話とはなんですか？」

バルドーさんは、さっきまでのふざけた顔から、仕事モードの顔になる。

そして、飄々と今の状況を説明してくれた。

話を聞いて、衝撃を受ける。

というのも、どうやら元老院の者達が暗躍しているらしいのだ。元老院は会議の議長であるベルト侯爵を中心とした、官職を保持することによって身分を保証された貴族——法衣貴族によって構成されている。呪いの館が封鎖されていたのも、エクレアさんが宮廷魔術師を辞めたのも彼らの行動が原因だったようだ。

確か昨日、マリアさんが「封鎖を国が直接行うのではなく、商業ギルドに指示してやらせていたのは不自然だったけど……どういう意図があったのかしら」なんて溢していたが、元老院が絡んでいたのか。

そして確か、エクレアさんは屋敷の封印に問題がないと報告しても、それを認めてもらえず、何度も再調査を依頼されたことが原因で宮廷魔術師を辞めたんだっただな。

元老院所属の貴族達は王家を追いつ落とすことで、利権を確保しようとしていたようである。

彼らは次の元老院会議で、王家の不正を弾劾すると息巻いているのだとか。

また、彼らの裏には貴族としては最高位の『公爵』である、デンセット公爵がいるら

しい。

事態を知った王家は元老院に対抗して、バルドーさんと協力して彼らの不正の証拠を手に入れようとしていて、元老院の策略を潰すのに、俺も関与しているようだ——って嘘でしょ！

「王家!? 貴族!? 元老院!」

「はい。まあ、明日で彼らの命運は終わりでしょうねえ」

さてえーい! そんな話は初めて聞いたぞお!

「なんで俺が王家とか偉い貴族とかの話に絡んでいるのおー!?」

「向こうが勝手に絡んできたのだから、仕方ありませんなあ」

何をそんなに呑気にいー!?

頭を掻きむしりたい衝動に駆られるが……気付く。

「あつ、でも明日には解決するの?」

「はい。すでに国王陛下と宰相殿には証拠や証人も引き渡しております。それを元に明日の元老院会議で処罰するのだとか。ドロテア様とエクレアにも証人として会議に出席するよう、お願いしてありますが、テンマ様にご迷惑をお掛けすることはたぶんありません」

ふうー、脅かさないでよー!
「それを報告に来たのかあ。焦っちゃったよおー」

もう関係なさそうだと聞いて、俺は胸を撫で下ろす。
しかし、バルドーさんは首を横に振る。

「いえ、話は別にあります」

えつ、ええええ、なんていつそう真剣な表情になるの？

動揺しながらも姿勢を正して質問する。

「な、なんででしょうか？」

「デンセット公爵が危険を察知したのか本日、王都を出てしましまして。その始末に行つてしようと考えております」

いやいや、なんでバルドーさんが？

「国王とか宰相が対処すれば良いじゃん！」

俺の言葉を聞いて、バルドーさんは苦々しい顔になる。

「デンセット公爵を追いつめるには証拠が足りないということもありますが……動機は、私個人の私怨でございます」

私怨？ そういえばデンセット公爵って……。

呪いの館の一件を思い出す。

バルドーさんの母親をはめたのは、デンセット公爵と闇ギルドだったはずだ。

「そうですか……それなら好きにして構いませんよ」

「ありがとうございます」

って言うか、俺に話さなくても内密に処理出来たでしょうに……。

母親の復讐って話なら、別に止めないしな。

あつ、そういえばあれがあつた！

「なら行く前に、その腕輪を返してくれるかな？」

バルドーさんに最初に会ったときに渡した、アイテムボックスや念話などを付与した魔導具の腕輪を指差して言う。

「そうですか……。やはり私怨で動くことは許されませんよね……ですが、こればかりは私も引くわけにいきません。短い間でしたが、お世話になりました」

バルドーさんは悲しそうな表情でそう言うのと、腕輪を外して返してきた。

えつ、えつ!? なんかなりアクションが思っていたのと違う！

「えーと、なんのことかなあ？」

腕輪を受け取りながら質問すると、バルドーさんは目を伏せる。

「テンマ様は暗殺——殺人はお嫌いですよ。これまで殺しても許されるような相手にすら、罰を与えるだけでしたから……。出来ればテンマ様に一生お仕えしたかったのですが、今回だけは相手を許すことが出来ません。母上から仲間を大切にしよう言われましたが、こればかりはわがままを通したいと思います！」

最後は俺の目をしっかり見て、バルドーさんはそう言い切った。
目には涙も滲^{にじ}んでいる。

「いやいやいや、何の話ですかぁー！」

「ちょ、ちょっと待ってください！」

「大丈夫です。覚悟は出来ていました。ただ……ピビの成長がこの目で見られないのは残念ですが……」

人の話を聞けえー！

俺は真面目^{まじめ}な表情で声を張る。

「バルドーさん、勝手に俺の気持ちを決めつけないでもらえますか！」

「えっ、も、申し訳ありません。しかし……」

バルドーさんは焦^{しやう}って謝罪^{しやざい}してきたが、まだ何か言いたそうだ。

しかし、まずは俺の気持ちをしっかりと言葉にしておくことにする。

「俺は確かに人を殺したくありません。ですが、それは殺したいと思うほどの人にまだ会ったことがないだけなんじゃないかとも思うわけです」

腹が立つことは正直^{ふしぎ}何度もあったけどね。

バルドーさんが、不思議^{ふしぎ}そうに聞いている。

「ですが我慢するより、殺した方が楽なことは多かったのではありませんか？」

えーと、それがこの世界の一般的な考え方なの？

「いやいや、楽だからって殺すのはダメでしょ？」

「確かにそうですね」

そうなんかい！

「ですが私がテンマ様にお会いする前、ジジ達に酷いことをしようとした商人やコーバル子爵家のシービックも殺さなかったとお聞きしていますか？」

おうふ、その話も知っているのね……。

確かにジジとピビを家族として迎え入れてすぐ、二人の叔父^{おじ}に当たるジャバウオックが好色漢^{こうしきかん}の貴族・シービックに差し出すためにジジを奪^{うば}おうとしてきたことがあった。

そのときに俺は殺しこしなかったが、シービックにもジャバウオックにも呪術^{じゅじゆつ}を使つて結構なペナルティを与えたんだよな。

「あ、あれは、アルベルトさん達が法に基づいて処理したから、露骨^{あつこつ}に俺が手を出すのは良くないと思って……」

内緒で手を出しています……。

「しかし、あれほど大事にしているジジやピビに関わることに、テンマ様が一切手出ししていなかったのは、不思議です。なので、テンマ様は人の命を奪うのを嫌っていると判断していたわけですが……」

間違いいではない。間違いいではないけど……。

「えーと、殺すのは簡単です。でも、それで良いのですか？」

「殺す以上の罰などないと思いますか？」

うーん、考え方が違うのかなあ？

「シービックは魔嫡^{はいちやく}され、幽閉^{ゆうへい}されていると聞きました。それは死ぬほど辛い^{つら}ではありませんか？」

「ふむ、確かに私の知っているシービックなら、死ぬより辛いと思うかもしれませんな。

しかし、貴族なら保釈金^{ほしゅうきん}を払って解放されるかもしれませんか……」

「でも解放されたところで元の地位に戻る可能性は、ほぼありませんよね？」

「……確かにそうですが、死ぬよりマシだと思っているかもしれませんよ？」

うう、話しちゃうかなあ。

俺は一瞬迷^{まよ}ったあと、十年くらい続く呪い^{のろい}をかけたことを話した。

するとバルドーさんは心底愉快^{ゆかい}そうに笑い声を漏^もらす。

「クククッ、あの残酷^{ざんく}で好色なシービックに、他人を傷つけようとする頭痛に見舞われ
たり異性に触れると鼻血^{はなぢ}が出たりする呪い^{のろい}をかけるとは。それに加えて味覚を正常に感じ
られなくなる呪いまで……今頃どうなっているのでしょうかね。はははは！」

「社会的な制裁^{せいざい}はアルベルトさんが与えたのですが、腹が立ったので、つい……」

そう言い訳する俺を見て、バルドーさんは笑い続けている。

「死んだら辛い思いをすることも、後悔^{こうかい}することもないですよ。だから、その方が効果
的かなと思って。それに、そんな奴相手に罪悪感^{ざいあくかん}を抱^{いだ}きたくないじゃないですか」

「くくく……た、確かに、確かに死ぬより辛いと私も思いますね……プツ！」

まだ笑っている……。

まあ俺が清廉潔白^{せいれんけつぱく}な人間でないと分かってもらえたならいいか。

さて、ついでに別の誤解^{ごかい}も解いておこう。

「あと、これをどうぞ」

アイテムボックスから髑髏^{どくろ}の飾りのついたネックレスを出す。

「こ、これは!？」

「最初に渡した魔導具の強化版です。前の魔導具に付与していたのはステータスに念話^{ねんわ}、
アイテムボックスだけでしたが、今度の魔導具はすごいですよー」

俺は胸を張って、魔導具の説明をした。

そう、この魔導具に付与されたアイテムボックスは容量がかつての十倍もあるし、衣装^{いしょう}
チェンジに認識^{しんし}障害^{そがい}、各種耐性^{じふしやう}強化まで付いている。

衣装チェンジは、収納された服に一瞬で着替えられる機能なわけだが、執事服^{しつじふく}や隠蔽^{いんぺい}効
果付きの諜報活動^{しほうかつどう}に特化した衣装^{いしょう}（忍者衣装^{にんやいしょう}）やパッチコイ系衣装の最新版（黒革で

作った。ビチピチの衣装) まで選べるようになっていた。

認識阻害と忍者衣装を組み合わせれば、諜報活動で相手に見つかるとはならないはずだ。「アイテムボックスにはそれ以外にも様々な装備や武器、薬品や魔導具まで入れておきました。まずは魔力を流して使用者登録をしてください。その後、前の腕輪からアイテムを移動していただくとよいかと!」

そう言って腕輪を一度返す。

バルドーさんが腕輪を手にとると、髑髏の目が怪しげに赤く光った。

魔力を流して使用者登録をすると、持ち主以外は使えないようになるんだよね。

それからバルドーさんは魔導具を装備して、目を大きく見開く。

「こ、これは……なんと!」

バルドーさんはおずおずと聞いてくる。

「よ、よろしいのでしょうか? 大量のポーシオン類だけでなく、霊薬や万能薬まであります……」

「バルドーさんの仕事柄、必要になるでしょう。ジジやビビにも霊薬や万能薬はすでに渡してありますし」

万能薬は病気を治癒する治癒ポーシオンの最上位。あらゆる病気を直せるのだ。

霊薬は万能薬の効果にプラスして破格の回復性能まで備えている。

怪我のみならず欠損した部位も程度にはよるが修復出来るし、状態異常や呪いにまで効くんだよな。

バルドーさんは驚いた顔をしたあとで、目に涙を浮かべる。

喜んでくれたのなら、良かった!

「私は誤解していたようです」

うんうん、そうだね!

「テンマ様は私より残酷なんですネ」

なんでやねん!!

「見たことも聞いたこともないようなえげつない薬品類が大量に入っていましたし、呪術の魔導具も、悪魔が作ったと言われても納得してしまいそうな出来です!」

褒められている気がしない……。

「ま、まあ。それぐらいで止めてくれる……?」

以前、前世のドラマや映画を参考にして、諜報や暗殺で使えるようなえげつない薬品や魔導具を作ったのだ。

バルドーさんに渡すかは悩んでいたが、母親であるフリージアさんの敵討ちをしたいって聞いて、ついさっき俺のアイテムボックスからごっそり移したんだけど……なかなかの評判である。

「申し訳ございません。嬉しさのあまり、本音がつい……」

その発言によって、俺の精神は更にゴリゴリ削られているんですけれど！

バルドーさんは少しの間黙った。恐らくアイテムボックスの中身を再度精査しているのだろう。

そして、言う。

「しかし、食料も半年分以上ありますね」

「ジジの料理を入れたときました。食べきったらジジに頼んで、補充してください」

ジジの料理に慣れると、他の食事に我慢出来なくなるからなあ……えっへん！

「それに、衣装も見ましたが……やはりテンマ様はこちら側を良く分かっています！」
えーと、それは間違いです。

前世の記憶を頼りに作っただけです！ 仲間認定はやめてください！

そんなふうに内心で言い訳をしていると、バルドーさんが神妙な顔で聞いてくる。

「本当にこれを使って、私怨を晴らしてもよろしいのでしょうか？」

「いいんじゃないですか？ フリージアさんの受けた苦しみを考えれば、それでも足りない気すらします」

そう言う——と同時に、反応の出来ない速さでバルドーさんが抱きしめてきた。

か、感謝の印……？

バルドーさんはすぐに抱擁を解き、跪いて頭を下げた。

「私は、一生テンマ様に仕えたと誓います！」

「そういうのはやめましょう。みんなで楽しく過ごす、それだけで良いじゃないですか。そんなわけで、魔導具のお礼として、今回の件が終わったらゆっくりさせてください」

「ふふふっ、それが一番難しい注文かもしれませんねえ」

おいおい、忙しすぎるのだけは勘弁してくれよおー！

第3話 元老院対策会議

国王は執務室で宰相と、明日の元老院会議に向けて最終打ち合わせをしていた。

「しかし、ベルント侯爵はこれだけあからさまに動いてバレないとも思っただろうか？」

ベルント侯爵一派の不正の証拠をまとめた資料を確認しながら、国王はまるで彼らが自滅したくてやっているとは思えず、そう声に出してしまった。

「バルドーの調査結果でなければ私も信じられません。実はこれは相手の策略のひとつで、我々を油断させようとしているのではないかと疑いたくなります」

宰相もあまりに愚かで単純な不正の数々に呆れていた。

彼は簡単に証拠や証人が次々と提出されるこの状況を、ベルント侯爵が明日の元老院会議に合わせて、自分の行った不正の証拠を提出してくれているのだと錯覚しそうになっている。

「本当に大丈夫か？　あまりにも子供じみた不正の証拠が続々と見つかっている。いくらなんでもこれは……」

「大丈夫でしょう。これほどの証拠と証人が揃っていれば、言い逃れることは出来ません。それに、元老院貴族の三分の二がすでに王家側についています」

元老院の貴族にも元々少数ではあるが、国王寄りの者達がいる。

しかし今回、普段はベルント侯爵にも王家にも与しない中立派もほぼ王家を支持している。

それだけではない。ベルント侯爵派の貴族の中からも、危険を感じて証拠の提出や証言をする代わりに減刑を求める者が続々と出ているのである。

元老院は『国王延いては王家が暴走しないように監視する』という名目で設立された組織だった。

しかし設立されてから長い年月が過ぎた今、王家と対立するだけの組織になり下がりが、更にはその権力を使って利権を貪るようになっていた。

バルドーが諜報員として王家に仕えていた最近までは、彼が秘密裏に不正を行う貴族を処理していたわけだが――

「バルドーが王宮から出ていって、膿が出てきたような形ですな。そう考えると、彼らとしてはバルドーが戻ってきたことはかなりの想定外だったことでしょう。ともあれ、これで膿は一掃出来る。しばらくそれによって国民は戸惑い騒ぐでしょうが……結果的に国政は安定するはずですよ。無駄な元老院の横槍がなくなることを喜びましょう」

「しかし、元凶はまた逃げ出したみたいだな……」

「仕方ありません。デンセット公爵は常に証拠を残さず、失敗しても自分だけは逃げられる位置にいる」

それを聞いて、国王は悔しそうな表情を浮かべる。

「さすがにあの人も大人しくなったかと思っていたが、まさかこのようなことになるのかな……」

デンセット公爵は、元々王族である。

彼は二代前の国王の弟であったが、野心を持った彼を警戒した二代前の国王は彼を王家から放逐した。

デンセット公爵家へと送った。

それによりデンセット公爵は、国王の継承権を失ったのである。

そんなデンセット公爵が狙うのは、自分の孫にあたる第二王子を王位につけること。そこまでの野心を持っていたことは、国王達にとっても予想外であった。

「以前から第一王子の周辺で不穏な事件は起きておりました。今回の件を考えるとすべてあの人が裏で糸を引いていたのでしょう」

第一王子は王妃との間に生まれた子供である。

その後国王は元老院から強引にデンセット公爵家の血縁者を側室として迎えるよう強いられた。そして国王と側室との間に生まれたのが、第二王子である。

第一王子は幼いときから毒殺されそうになったり、事故に巻き込まれそうになったりと、命を脅かされることが多々あった。

それらはバルドーが作った王宮の諜報組織により、未然に防がれてきたわけだが。

「そうまでして王位につきたかったのか……国王など気苦労ばかりで、欲しければ議決してやりたいくらいだというのに！」

「そうなると国は乱れ、国民が辛い思いをすることになるでしょう」

国王もそれは理解しているので、口を噤む。

数秒間の沈黙の後、国王は呟く。

「まだ、何かしてくるだろうな……」

「間違いありません。デンセット公爵領は隣国のホレック公国と接触しています。ホレック公国は小国ですが、塩の産地です。これまでわが国と対等に付き合ってきたのは、その資源の貴重さ故。ロンダで塩が大量に採れたことでその関係性が変わることを恐れ、デンセット公爵の甘言に惑わされて反抗してくる可能性は低くないでしょう」

だからこそ国内を安定させることが急務だと、国王も宰相も考えていたのであった。

第4話 デンセット公爵

王都から馬車で一日進んだところにある町の中の宿で、デンセット公爵一行は休んでいた。

彼らは現在、自分達の形勢が不利なことを悟って王都から自領へと引き返している途中である。

また、ここはそれほど大きな町ではないが、国の主要な街道沿いということもあり、宿

のレベルはそれなりだ。

デンセット公爵は、その中でも最上級の宿の最上階を借り切っていた。

「まさかバルドーが戻っているとはな……」

最上級の部屋——スイートルームのソファに座りながら、デンセット公爵はそう呟いた。

「もしかしてバルドーが王宮を辞めたのは、油断した我々が動き出すよう仕向けようとしてのことだった、という可能性は……?」

そう聞くのは、ベルント侯爵の従者の男である。

「それはないな。闇ギルドの調査によると、奴は王宮を辞めた後、国と一切の関係を絶つていた。ロンタでテックス関連の仕事をしていたのも確認してある」

答えたのは、闇ギルドの幹部のタランティ。

見た目はごくごく普通の男といった風情だ。

闇ギルドは、非合法的な組織であり、彼は暗殺や諜報活動をメインに行っている。

ちなみにテックスとは、テンマが異世界で得た知識を、あらゆる情報を登録出来たり特許申請出来たりする『知識の部屋』という場所に登録した際に、目立ってしまったように使った偽名である。

ここ最近ではテンマがバレル形でチートな能力を使ったこともあり、それなりにテックスがテンマであることは知られてしまっているのだが、王都にいる者達はそれをほとんど知

らない。

「私の調査でも、バルドーが辞めたことで国王や宰相の周辺で相当な混乱が起きていたことは裏が取れています。特に宰相は相当焦っていました。バルドーが辞めたことにそういった意図はないはずです」

そう言い切るのは、デンセット公爵家の執事だ。

彼はデンセット公爵家が持つ情報網を掌握する立場にある。

王宮や他の貴族の元にも多数の密偵を送り込み、常に情報を集めている。

ちなみに元王族のデンセット公爵も、元々は当然王宮に伝手があつた。

とはいえバルドーが王宮に採用されてからは、彼が目光らせていたため大した情報が得られなくなってしまうていたわけだが。

「これで打てる手がほとんどなくなってしまうたではないか！」

デンセット公爵は顔を真っ赤にして叫んだ。

バルドーが王宮を去ってから少しの間ではあったが、デンセット公爵は何度か第一王子を暗殺しようと動いていた。

しかし、彼が作り上げた諜報組織がそれなりに機能していて、計画は成らなかった。だから元老院を利用して王家を弱体化させ、第一王子の暗殺を行いやすい土壌を作る、というのが今回の作戦である。

しかしこれもバルドーが王都に戻ってきたことで、実現はほぼ不可能になってしまっている。

すぐに対策を検討していた彼らだったが、その間にベルント侯爵が暴走を始めたせいで、手遅れになってしまったのだ。

バルドーが王宮を去ったからといって、性急に事を進めすぎた——今になってデンセツト公爵はそう思う。

（いや、違うか。塩がロンダから供給されたことが菌車が狂ったきっかけだ）

ヴィンチザード王国の塩の八割は隣国のホレック公国から輸入された物だ。そして残りの二割は帝国から輸入している。

そのような内訳になっているのは、帝国と王国は頻繁に小競り合いを起こしてしまい、供給が安定しないからだ。

そしてデンセツト公爵領は王国で唯一ホレック公国と隣接しており、塩の供給がある程度調整出来る状態にあった。価格や購入量は国家間で決められているために弄れないものの、流通先を秘かに調整することで、領地持ちの貴族に対して強い発言権を得ていたのである。

しかし、テンマがロンダの近くで大量に岩塩を採掘出来る場所を見つけ、それをロンダに供給した。

しかもロンダは塩を出し惜しみするようなことはない。

デンセツト侯爵からしてみれば、ロンダから塩が大量に安価で仕入れられるようになれば、自身の影響力が弱まってしまうため、非常に困る。そこで、策を仕掛けた。

ロンダから塩を王国内に出荷するには必ずコーバル領を通過する。ロンダは森に囲まれた辺境の領地で、唯一道が繋がっているのがコーバル領だからだ。

コーバルを統治するコーバル子爵は、息子であるシービックの失態で資金難に喘いでいる。

そんな状況を見て、デンセツト侯爵は『ロンダから出荷する荷物に関税を高くかければ、それで家を立て直せるのではないか？ 私の手を回してやろう』と持ちかけたのだ。

もちろん関税をかけるには理由が必要で、国の許可がいる。とはいえ、ロンダから塩が出荷されれば国内の塩の流通量が増えるのは間違いない。

関税を使って道の整備をすると説明すれば、許可は簡単に下りるはずだった。

しかし、国王や宰相は難色を示す。

デンセツト公爵は元老院に根回しした上で、再度申請を行った。

その結果、まずはお試しのような形で高い関税をかける形で運用し、それで上手くいくという実績を作ればそのまま進めようということに。

ただコーバル子爵家は実績を作るための資金すらないので、それはデンセツト公爵が負

(いや、このしじいがこれまで殺されていなかったことを考えると納得は出来るか。だからといって完全に油断は出来ない。警戒は必要だな)

立ち読みサンプル はここまで

とはいえ、そもそもこれまでの権力を失った公爵に闇ギルドがこれ以上肩入れする理由はない。

淡い期待を抱きつつ、タランティはデンセット公爵に尋ねる。

「とはいえ、危険は危険だ。闇ギルドの連中を引き上げさせることは出来ないか？」

「何を言っておる！ 護衛依頼は領内に戻るまで継続される。当然のことだ。どれほどの金を払っていると思っているのだ！」

タランティも断られるとは分かっていたので、一つ息を吐いて頷く。

「ああ、分かった。うちの護衛は残すが、俺は先に現状を上へ報告しに領都へ行かせてもらう。だから今度会うのはそこになるかな」

「闇ギルドの仕事はいい加減だな。分かった、ついでに今の状況を息子にも伝えてくれ。おい！」

デンセット公爵は執事と呼んだ。

執事から受け取った書類を、公爵はタランティに差し出した。

それを見て、タランティはデンセット公爵が最初から自分に伝令役をさせるつもりだったと気付く。

「なんだよ、最初から俺に行かせるつもりだったんじゃないかねえか」

書類を受け取りながら文句を言うと、デンセット公爵は鼻を鳴らす。

「ふん、別にお前じゃなくても構わんが？」

タランティは再度ムカッとしたが、早めに彼らと別れたかったので、それ以上は何も言わずに書類を受け取る。

「すみませんが、この手紙もお願いします」

従者の男はそう言うのと、用意していた手紙をタランティに差し出した。

「報酬は出るんだろうな？」

「報酬を渡すよう手紙に書いてありますので、向こうで受け取れます」

「チッ」

面倒臭い仕事を任されたと思い、舌打ちするタランティ。

しかし、あえて自分が足を運ぶこともないなと思ひ直す。

「それじゃ俺はこれで失礼するよ」

タランティはそう言うのとベランダ側の窓から出ていってしまった。

デンセット公爵は執事に言う。

「おい、警備を強化するように伝えろ。バルドーはともかく国王や宰相が強硬手段に出てくる可能性もある」

「はい、それと……」

執事は、そこまで言ってからなかなか言葉が発さない。